寺報 善巧（ぜんぎょう）　第1号　昭和52年1月1日

寺報 善巧（センケウ）

発行
〒938 富山県下新川郡宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

寺ごよみ　一月

一日　元旦会　本堂にて早朝五時より「往生礼讃偈」を勤修。

三日、四日　栗虫にて本山御助成会

七日、八日　栗虫地区、報恩講廻り

十三日、十四日、十五日、十六日　十三日より十六日まで御正忌報恩講執行（御正忌報恩講とは真宗にては毎年執行する宗祖聖人の祥月の法要のことで御正当の忌日と云う意味です。この法要は聖人の遺徳を偲びつつ、ご恩徳に報謝するもので、真宗門徒にとって一番大切な行事であります。）

逮夜　十三日、十四日、十五日の毎日午後二時

初夜　十五日午後七時

晨朝　十六日午前八時

満座　十六日午後一時

二十一日　浦山地区　報恩講廻り

二十一日より三十一日の期間中の予定。

御正忌報恩講執行

一月十三日より十六日まで

法話「御文・御正忌の章」
本山布教使　当山　若院

十三日	逮夜	後二時
十四日	逮夜	後二時
十五日	逮夜	後二時
	初夜	後七時
十六日	晨朝	前八時
	日中	正午前
	満座	後一時

明けまして　お目出度うございます。
旧年は、色々とお世話になり有難う御座いました。
本年も相変らず御引き立てを願います。

新しい年を迎えて

善巧寺では、元旦の「おつとめ」は、「らいさん」をあげます。御晨朝の勤行は、五時です。五時と云うと、まっくらで、内陣は、身を切るような冷たさで、吐く息が、凍りつくようです。

新しい年の始めに、法灯の揺らぐ中で、調声の声を張り上げるとき、何時もの事ですが、身の引き緊まる気持に引きこまれるのです。

「今年も頑張らねば」と、如来さまの前で、誓いたい心持、皆様のお蔭で今日迄生きて来たことの感謝の思い、静かに自分の心を省みたい謙虚な気分、色々の思いが浮んでは消え、寒さ、冷たさは、何時しか忘れてしまいます。

明教院の二百回忌を五年の後に控えて、今年のお正月は、特に感慨の深いものがあります。

おつとめが終り、家族―現在は孫どもを合せて七人家族―と一緒に、お雑煮を祝う頃には、もう、年賀の御門徒の顔が見えます。

広間の受付には、毎年、定まった帳場係が、記帳して下さいます。

川向うから車で御出でになるかた、地元から雪道を歩いて来られるかた、毎年顔なじみが揃って、世間話に花を咲かせるのです。

三十八年の豪雪の時を除いて、三十年、皆勤だと云う方もあれば、年寄りの代理で、初めて来たと云う方もあり、旧下新川一円に散らばっている善巧寺門徒の、老若男女が、斯うやって、如来さまに挨拶に御出でになる姿の美しさを、此の私は、もう三十年、眺めて参りました。

「昭和〇〇年　年頭詣帖」と表紙に書かれた、和紙の帳面が、三十数冊、残っていて、今は亡いなつかしい人達のことを思い廻らせる時もあります。善巧寺の広間は、戸外の寒さをよそに、暖かい人の心で、和らぐのです。照行寺、法輪寺の両坊守に、終日、台所で調理して頂いた、きんぴら牛蒡、煮豆、蕪の酸漬けのおつまみに、年酒を酌み交す門徒衆の明るい表情。

本当に、つたない身の幸せを、つくづくと感じさせて頂いています。

合掌
雪山　俊之

寺報 善巧（ぜんぎょう）　第1号　昭和52年1月1日

なぜ法要を行なうのか？

御恩とは　御縁とは

法事というものを、なぜするのだろう？　その意義は、いったいどこにあるのだろう？　なくなった人はどこへゆくのだろう？
そんな素朴な疑問が、じつは念仏の道を聞きひらく、大事な手だてとなることを、わたしたちは忘れてしまってはいないだろうか。

昨年秋のこと、浦山の壮年の方が寺へこられて

「近く、父の三回忌をするのですが、若いわたしには仏教のことが何もわからず、なぜ法事をするのかも知りません。これでは死んだ父にも申しわけない気がしますので、どうか、法事の意義というものを聞かせて下さい。」

と、申されました。ともすればわからないものをわからないままやりすごしてしまったり、あやまった考えをそのまま放っておくわたしたちの中にあって、この壮年の方のひたむきな態度には、心打たれるものがありました。

そこで、わたしたちはいま、この欄において、この方の疑問を、わたしたちみんなの疑問として、法要というものはなぜ行なうのかということについて考えてみたいと思うのであります。

◇　◇　◇

まず「法事」「法要」と聞けば、「死んだものへの追善供養である」と思われる方が多いのではないでしょうか。

なくなったものが、あの世で、地獄か餓鬼道かに迷い込んでおるかもしれない。そこで命日に坊主を呼んで、お経の一巻でもあげてもらって、その功徳によって、迷わず成仏してくれよとたのむ―。

これが法事だと考えている方が意外に多い。ところが、これは他宗、他門のものがいうことで、わたしたち親鸞聖人の教えをうけている浄土真宗では、このようなことはいわないのであります。

なぜなら、親鸞聖人がおひらきになった浄土真宗―お念仏の道というのは、阿弥陀如来の本当の願いより出ているもので、このわたしが、如来様に救われて、安心のうちに力強く生きぬき、かならずお浄土に生まれて仏のさとりを得るのであります。つまり、なくなられた方々は、間違いなくお浄土におられて仏となり、如来様と同じお仕事をなさっているのです。

ですから、そのような方たちにお経の功徳で、迷わず成仏しろとか、さぞや草葉のかげでよろこんでいるだろう、などということは必要でないどころか、失礼にあたるわけであります。

◇　◇　◇

さて、それでは、わたしたちお念仏をいただく浄土真宗の門徒にとっては、法事、法要というものは、どのように受け取ってゆけばよいのでしょうか。そうです。法事は、死者への追善供養ではなく生きているわたしたちが、なくなられた方の命日を「ご縁」として故人をしのび、経典をよみ、仏徳を讃嘆し、仏様の「ご恩」をよろこばせていただくためにあるのです。

「ご縁」をよろこび「ご恩」をよろこぶ――つまり、わたしたちは仏様の「おかげさま」で、いまこうして生かされているのであり、「ありがとう」と手を合わせて生き抜いてゆけるのであります。

このように考えてまいりますと結局、法事、法要というものは、なくなられた方（いまは仏となられた方）の命日を「ご縁」にしてその方たちの「おかげさま」で生かされておるという、そのよろこびの表現そのものであり、「ありがとう」と生き抜く力を与えて下さった仏様への感謝のありたけということになるでありましょう。

◇　◇　◇

浦山の壮年の方のご法事は、よろこびと感謝にあふれたものであったことを、最後につけ加えておきましょう。

寺ごよみ　二月

一日　**お講**　当番　浦山地区
（お講とは信徒が集って教義を相談し祖徳を讃仰する会合であって蓮如上人の時代に各地で盛んに行なわれました。御文章の第四帖に『そもそも毎月両度の寄合の由来はなにのためぞというにさらに他のことにあらず自身の往生極楽の信心獲得のためなるがゆへなり…』と）。お揃いでご参集下さい。

お講　当番　下立地区
十六日　音沢にて**本山御助成会**

十七日　十八日　十九日　下立地区　報恩講廻り

二十日　二十一日　三日市地区　報恩講廻り

二十三日　二十四日　生地地区　報恩講廻り

二十五日　内山淳風会法要
内山常照寺にて

昭和52年1月1日　第1号　寺報　善巧（ぜんぎょう）

三法要

・宗祖 700回忌
・御誕生 800年
・明教院200回忌

五年後への第一歩踏み出す

法要とは、わたしたちがお念仏に生かされているということの、よろこびの表現であると先に申しましたが、わたしたちの寺、浦山善巧寺では、五年後の秋に、当山中興、明教院の二百回忌を迎えます。これを機に、これまでお迎えできなかった宗祖、親鸞聖人の七百回忌と御誕生八百年を合わせて、三法要を勤修する運びとなりました。わたしたちは、この三法要を、よろこびのうちにお迎えしたいと思うわけであります。

ところで、この三法要を勤修するに当たり、寺としては、三つの大きな事業を計画しております。

一つは、わたしたちが浄土真宗のお念仏をいただいて生かされているという自覚、これを確かめ合うための門信徒会運動の推進です。つまり、心の準備とでも、申しましょうか、

各地区で暖い御支援!!

そういったものを、この新年を期して、法要を迎えるまでに、実りあるものにしてゆきたいと思うのであります。

二つには、本堂の内陣、基礎、窓壁等の修復であります。これには多額の浄財を要するようで、現在、専門仏具関係者に見積りを作らせておりますが、どう少なく見積っても一千万円はかかるであろうとのことであります。

三つには、本堂と庫裡の間にある、通称「御殿」が老朽化して使用不能となっており、この「書院」の建設、そしてその付帯事業として門信徒の方々の、いこいの場「お茶所」の建設を考え、現在専門家にこれの計画案を練らせております。

以上三つの事業のうち、一については、寺の努力で如何ようにもなろうかと思いますが、二、三の件については、門信徒の方々の御協賛、御支援がなくては、一歩も前に進まないわけであります。

こうしたことから、寺では五十一年度の報恩講より六年計画で、これまでいただいておりました寺費（板がえし）を五倍に値上げさせていただき、これを基準に御協力願っているわけであります。

もちろん、法要は華美に流れず質素を旨として行なうつもりではありますが、何分、物価高騰の折から、この事業と、法要準備費とを合わせると、ざっと四千数百万円になろうかとの見込みです。

おかげさまで、旧年中に約半数の御門徒をまわらせていただきましたが、意のあるところをお汲みとり下さって、多大なる御協力をいただきました。報恩講は三月上旬までつづきますが、これが終わり次第、三法要推進の総代会、そして門徒大会を開らき、具体的な事業計画の決定を行ないたいと考えております。

事業計画の決定を待たずして、寺費の値上げをしましたのは、少しでも、門信徒の方々の一回分の負担を少なくしようとの考えからでございますのでご理解下さい。

住職日記

十月二十九日　金曜日　大荒れ

門徒報恩講廻り第一日。八時半出発。本年度からは、自家用車が出来たので、色々と便利である。上飯野一軒。昔は「カミノのカンジャ」と言って、浦山あたりからも、農具、馬蹄の修理に行った由。今は、鉄工所となって令息が頑張っていらっしゃる。お正信偈を上げ、家族の方達に向って、お説教をする。僅か三分か五分のお説教にしても、これから来年の三月迄、約五百二十戸の御門徒のところで、合計二千六百分のお話をすることになる。出発の際は晴れていた空が、怪しくなってくる。

黒西組の慶恩寺の御住職の葬儀に参勤する。温厚だった人柄に似つかわしい、落ち着いた葬礼。これで、私も、組内で五番目の長老組に数えられるようになった。

生地より引き返し、青木へ。昼食を頂いている中に、吹き降りの大悪天候となる。みぞれまじりの突風が、時々、窓を打つ。

東狐国道沿いの九戸は、雨風の中の勤行である。戸外は嵐だが、一年一度の報恩講に、近所の方も御一緒に、お仏壇の前に坐っている人の表情は明るい。

何年か前にもこんな日があったとか、いや、あの時は、道が真白になったとか、話して下さるのは、大低、お年寄りである。

終って、車を新浜に廻す。此処に、三戸ある。真暗の中に、相かわらず、風が吹きつけて来る。此の漁村も、近年、様相が一変した。殆んど新築である。時間が遅くなったので、家族全員が揃っている家が多い。

下飯野で、夕飯の御馳走になり、帰院は九時前になる。

十月三十日　土曜日　晴

昨日の悪天候に比べて、今日は快晴。板屋地区十七戸である。今日は、総代の家に車を置いて、一軒づつ歩いて廻る。此の地域は、基盤整備が完成して、景観が完全に一変した。竹藪があり、葭原に葭切りが鳴き、わさび畠が続き、小川で鮭がとれた昔の姿は全くない。併し、米作りに精を出す勤労意欲は、昔と変らぬようである。

此処数年、お年寄りが大分亡くなっている。引き伸したお写真が掲げられている家が多い。夫々の家で色々なお話を聞く。門徒廻りのお蔭で農機具の話、チューリップ球根の話、農村婦人会の話等々、知らない世界の色々な知識を聞かせて貰って本当に楽しい。今日は明るい中に帰院。十一月初旬は、若栗二ヵ寺、三日市一ヵ寺、内山一ヵ寺とお仲間の寺院報恩講が続く。

振舞酒　野菊の道を　迷いけり
僧形の　野分の径に　亡せにけり

寺ごよみ

三月

一日　**お講**　当番　浦山地区
二日　舟見地区　報恩講廻り
四日　栃屋、熊野地区　報恩講廻り
六日　入善地区　報恩講廻り
十六日　**お講**　当番　栃沢地区
下旬　**本山団体参拝**　朝な夕なにわが家の仏だん。月に二度は寺まいり。そして年に一度は本山へ―。恒例の団体参拝の日程は一月中には決まりますのでお楽しみに。

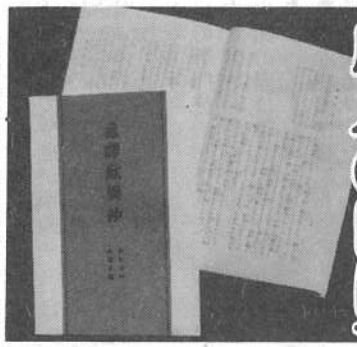
三法要推進門徒総代会

昨年秋より準備を進めております三法要の事業計画案が、三月下旬頃にはまとまりますので、各地区の総代の方は万障繰り合わせの上ご出席下さい。なお、三法要に関しての お問い合わせは、寺へ電話ででもどうぞ。いつでもご相談、ご説明にあがります。

昭和52年1月1日　第1号　寺報　善巧（ぜんぎょう）

新成人に「歎異鈔」

成人の日にプレゼント



青春時代は人生の花であります。それだけに、この時代をどのように生きるかが、その人の人生を決定するといっても過言ではありません。正しい生きかたとは、一体なになのか。人生の意義を親鸞聖人にたずね、悔いのない青春をおくりたいものです。

教えを聞き、よき師、よき友がきを結ぶことは、あなたの青春をより豊かに、意義深くするにちがいありません。

こうした目的のもとに、浦山善巧寺では、若者を中心とした門信徒の会の結成に乗り出すことにしているのですが、その第一歩として、まず、一月十五日、成人式を迎える若人に、永遠の名著「歎異鈔」（現代語訳つき）をプレゼントいたします。

「歎異鈔」はご存知の通り、親鸞聖人の信仰体験をナマのことばでつづった書です。わずかな頁数ではありますが、一生かかっても読みつくせないほどの、味わい深い聖教です。

ちょうど十五日といえば、寺では、聖人の御正忌の法要が営まれています。ハタチの諸君、そしてハタチを越えた青年、壮年諸君も、十五日の午後一時には、身のひきしまる冷たい寺の御堂にお越し下さい。そして、心豊かに生きる道について、人生のダイゴ味とは、何かについて話し合いましょう。

各地に門信徒会を

五年後にせまった、善巧寺の三法要の推進のために、寺では門徒の方々と手をとり合って、お念仏の輪を広めようと、今年から、各地区において、門信徒会運動をはじめようとしています。

これは、音沢から魚津まで、各地に転在する善巧寺の門信徒を、ブロック別に分けて、同地区の総代の方、あるいは青年団、婦人会、老人会のお世話をなさっている方たちの肝入りで、会場を設営していただき、寺より、住職あるいは若院が出向いて、法話、講演、あるいは宗教相談というものを行ない、実りある集いにしてゆこうというものです。

つまり、これまで行なわれてきた「お講」や「御助成」「お七昼夜」をさらに発展させて若い方たちにも参加していただこうというものです。

どんな所へでも、また、どれほど少人数であろうと、よろこんで出向き、日頃お寺とあまりご縁のない門信徒の方たちとも、大いに語り合ってゆこうと思っています。

現在、浦山ではこの意趣にご賛同下さった壮年の方が、宇奈月地区の「若者の会」の結成をいそいでいます。

各地区の心ある方は、どうかこの門信徒会運動の推進にご協力下さい。ご一報いただければ、いつでもご相談に伺います。

お講の食事代七十円に

一日と十六日、毎月二度の寺のお講の食事の代金が、今年から、七十円に値上げされました。

これは、昨年の総代会で決まったもので、これまでの五十円では、材料費の値上がりなどで、とてもやってゆけないという声が、奉仕をして下さる各地区の、皆さんから出たからです。御協力を…。

御恩報車!?

ボクはお寺のクルマです。これまで、浦山の寺には、法務・送迎用のクルマがなく、門徒の方々には、なにかと御苦労御心配をかけていましたが、もう大丈夫。

黒塗りのトロトロで、一見、新車のように見えますが、じつは45年型。中古車というより大古車に近いという老朽車です。

でも、気力は十分。高島さんの慎重な運転で、昨年十月から事故も故障もありません。住職も「これのおかげで長生きできる」といっています。力の続くかぎり、御恩報謝で走らせていただきます。

合掌

新年のよろこびをあらわすことばに「御慶」というのがあります。親鸞聖人は、この「慶」という字の意味を

ウベキコトヲ　エテ
ノチ　ヨロコブ

とおっしゃっています。つまり来たるべき新年を、おおみそかに前もってよろこぶというのではなく、まさにいま、わたしたちは、五十二年の元旦を迎えて、ウベキコトヲ　エテよろこぶわけです。

○　○

ところで、聖人のおっしゃったウベキコトとは、何でしょう。

わたしたちは、ウベキコトといえば、すぐに俗世間の物質的欲望を満たすことと考えがちですが、聖人のお心はそうではありません。

ウベキコトとは、まさしく、わたしたちの心の安らぎのことであります。いそがねばならないのは、心豊かに生きてゆける〝道〟を求めることであります。

寺報「善巧」は、そんなあなたの問いに答える、寺と門信徒の機関誌として、今後、三ヵ月に一回、皆さまのお宅にお届けします。どうぞどうぞ、ご愛読下さい。